toi toi toi!

トイ トイ トイ！

ステージはそこにある

01

2023.04

Iida Cultural Hall
Information Magazine

飯田文化会館 情報誌　創刊にあたって

昭和47年に飯田文化会館が開館して半世紀。
現在は、いいだ人形劇フェスタや伊那谷文化芸術祭をはじめ
さまざまなイベントが開催されています。
それらは市民の楽しみの一つであり、多様な世代の交流の場となっています。

飯田下伊那の舞台芸術の拠点となっている文化会館。
その特徴の一つは、市民が舞台に立つだけでなく
裏方として携わることが非常に多いということです。

令和4年6月に始まった新文化会館整備検討委員会では
新しい文化会館が「みんなが集い、創り、伝える　感動の飯田ひろば」
となることを願い、さまざまな意見が交わされています。

「まちづくりと文化で大事なのは、楽しさを伝えること。
自分たちが楽しいから（文化が）育っていく。
つくるんじゃなくて、できていくということを大切にしたい」

令和5年2月、1人の委員の発言にほかの委員も深くうなずきました。

この情報誌では、飯田の芸術文化が育てられてきた土壌や背景を振り返りながら
過去と現在と未来をつなぐための情報ツールとして
「飯田にふさわしい」「飯田らしい」とは何かを探求していきます。

これからも続いていく文化の物語。あなたも参加してみませんか。

TOWARD THE NEXT STAGE

飯田市で芸術文化に携わる
これからの地域を担っていく方々をご紹介

青春の思い出を最高の舞台で

渡邉祐輝さん *Yuki Watanabe*

令和4年10月、飯田文化会館ホールにて「高校生の光り輝く姿を残そうプロジェクト」の撮影会が開催されました。このプロジェクトは、一般社団法人 飯田青年会議所（以下、飯田JC）が企画・主催し、第１回は令和３年に開催。音楽やダンスなどジャンルを問わず、高校生の団体パフォーマンスの成果を映像として記録し、動画サイトで公開することを目的に実施。飯田下伊那在住の高校生のステージパフォーマンスを、プロのカメラマンが撮影し、編集された映像を動画サイトで公開しています。

この企画・運営の中心となっていたのが、飯田JCメンバーの渡邉祐輝さん。ダンスを仕事としていた自身の思いや経験を生かした内容を企画しました。開催に至った経緯を渡邉さんは「コロナ禍で文化祭や修学旅行など学校行事が自粛される中、高校生たちの青春の思い出が失われているのを感じていました。その頃、飯田JCでは『青少年がこの街を元気にしていく。その青少年に向けて何かできないか』という声があり、コロナ禍でも頑張っている高校生たちを、何か元気づけることができないかと考えました。私がやっていたダンスの分野だと、以前はダンスだけで生計を立てるのは難しかったけど、今はSNSなどでより身近なものになっていく中で、ダンスを生業（なりわい）とすることもできるようになってきている。新しい価値観が生まれてきている現状で、若者の感性で何かおもしろいことができるのでは？と思い、飯田JCの中で『若者の好きなものにフォーカスする』ことをテーマとした委員会を立ち上げました」と話します。

ダンサー時代の渡邉さん
（写真中央）

渡邉 祐輝

わたなべ・ゆうき ｜ 1989年生まれ。飯田市出身。中学3年生からダンスを始め、高校卒業後アメリカ・ロサンゼルスにダンス留学。帰国後アルバイトをしながら研鑽を積み、バックダンサーとして著名グループやアーティストの全国ツアーや歌番組、紅白歌合戦などに出演。国内外で活動を行う。24歳で料理の道へ。29歳で帰郷し、家業である今宮半平の次期代表として仕事をするかたわら、飯田JCのメンバーとして地域活性に関わる活動を行っている。

令和3年の春、委員会立ち上げ当初は、俳優の方と「好きなことを仕事にする」というテーマで対談し、オンラインで配信したり、ダンスレッスンの体験会などを行っていました。そんな中で渡邉さんは「高校時代の活動を、一生残るきれいな映像として残してあげたいという気持ちが高まっていった」と話します。過去、ダンサーとして仕事をしていた時、仕事以外の場所できれいな映像で撮ってもらったことがなかったことを思い出し『最高の舞台で、最高の思い出作りを』というコンセプトのもと、このプロジェクトをスタートさせました。

しかし、いざ参加者を集めるとなると、学校外で活動をしている高校生たちは前向きな反応でも、コロナの影響で部活動ができていない高校生たちからは「今、発表するものが何もなくて」という声が多く、思いのほか苦労も多かったそう。「ジャンルはバンドやダンスだけでなく、例えば書道パフォーマンスや吹奏楽など演目はなんでも良くて、いろんな高校に出演依頼をしたのですが、コロナの影響は大きく、なかなか出演に至るには難しかったです」と話します。そんな中で迎えた撮影当日。ダンスとバンドのグループ合計７組の参加となり、撮影は1団体20～30分の中でリハーサル・本番を行いました。

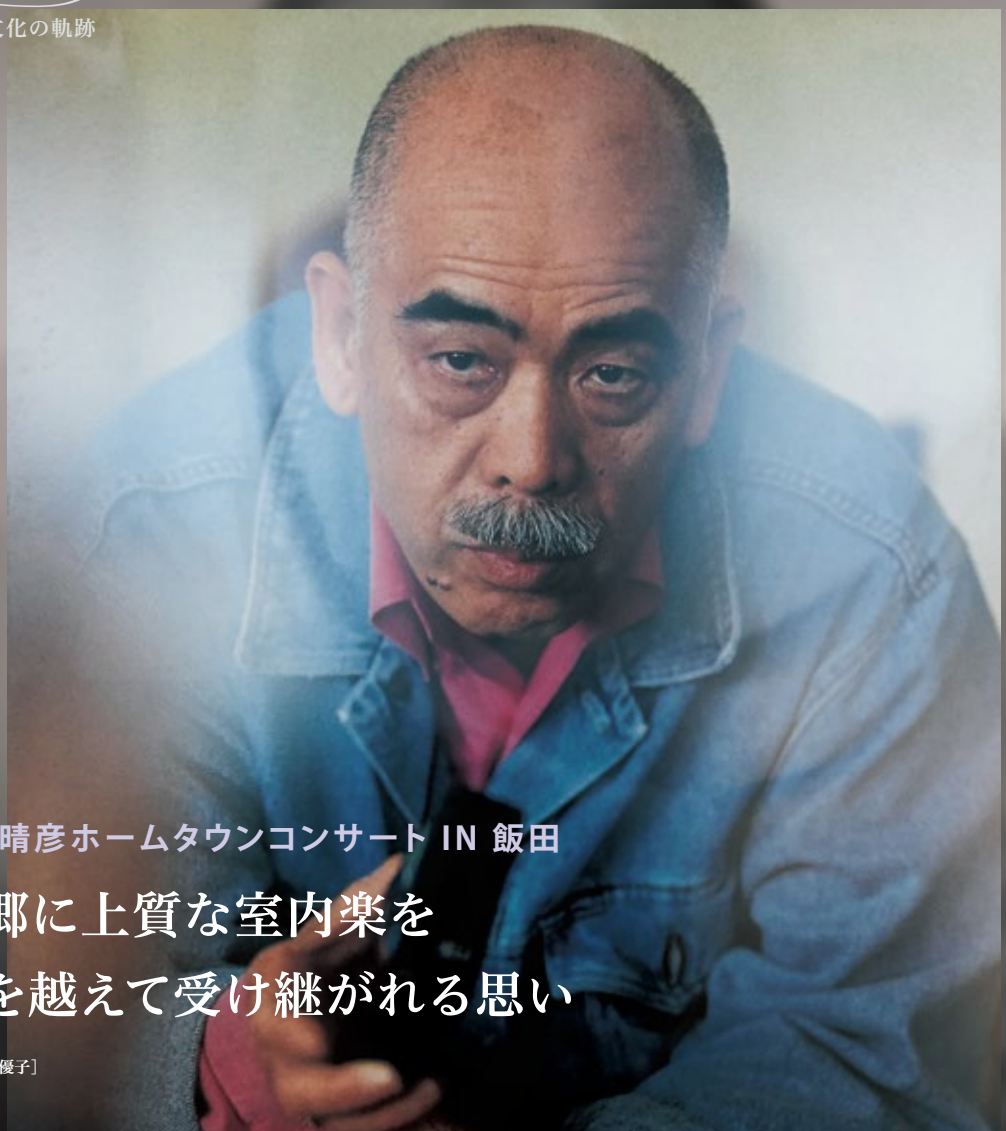
撮影会を終え、渡邉さんは「これだけの事は、たくさんの方の力を借りないとできなかった。時間のやりくりや参加団体を集める苦労など、やはりコロナの影響は大きかった」と話す一方、やっていて良かった事をお聞きすると「一番は高校生たちの喜ぶ顔。パフォーマンスを見ていると『ああ青春してるなあ』って思います。それと、令和3年の１回目に出てくれた高校生が『すごく楽しかったので、次回はボランティアで参加したいです』と言って2回目の撮影会当日に手伝いに来てくれたんです。実はこのプロジェクト、2回目の計画はなかったんですが、１回目をやった時、高校生がみんな喜んでて。それを見てる私もうれしくて楽しい感情が湧いてきました」と、大きな反響に喜びを表しました。さらにうれしかった事として、令和3年の１回目に出演した風越高校の軽音楽部は、そのパフォーマンスの影響で部員数が大幅に増えたという話も。「風越高校の軽音楽部の子たちって、みんな上手なんです。それぞれのバンドにファンがいたり、憧れの存在になっているようで。そんな学生たちにとって良い刺激になっているとしたら、このイベントも意味があるのかなと思います。ゆくゆくは、このイベントがあるからうまくなりたいっていうような、目標になるものになっていくといいなと思います。また開催する場合は、映像に残せるパフォーマンスであればどんなものでも参加してもらいたい」と話します。

また、飯田文化会館での開催について渡邉さんは「私にとっても文化会館は思い入れが深い場所なんです。自分も高校生の時に文化会館の舞台でダンスを披露したり、夜になるとホール入口のガラスのドアが鏡のように映るので、毎晩のようにそこで一人、ダンスの練習をしていました。なので、文化会館で開催できて本当に良かった」と、自身の青春の１ページにある飯田文化会館で開催したプロジェクトが、高校生たちの思い出になったことに、充実感を表しました。

このようなプロジェクトを企画・開催し、発信をする立場として今後についてお聞きすると「飯田市でワクワクを増やしたいですね。私自身ライブやフェスなどエンタメが好きなんです。年齢問わずいろんなジャンルの方が集まって、ワクワクを提供できる文化祭のようなイベントができたらいいですし、その映像も残していきたいです」。自分自身がエンターテインメントの世界を経験しているからこそ、尻込みせずに自信をもってできる！という、渡邉さんの力強い言葉から、熱い思いが伝わってきました。

［インタビュー・文＝北林 南］

高校生の光り輝く姿を残そう！
プロジェクト
動画はこちらからご覧いただけます



萩元晴彦ホームタウンコンサート IN 飯田

故郷に上質な室内楽を 時を越えて受け継がれる思い

［文＝平松優子］

「萩元晴彦ホームタウンコンサートIN飯田」は、飯田市馬場町生まれの故 萩元晴彦さんが平成８年に創立したコンサートです。「生まれ故郷の飯田に上質な室内楽を」という萩元さんの思いに賛同した飯田信用金庫が全面的に協力。市民有志からなる実行委員会が主催し、今年で記念すべき20回目を迎えます。

日本初のテレビ制作プロダクション「テレビマンユニオン」の初代社長であり、日本屈指のテレビプロデューサーとして、また音楽プロデューサーとして名を馳せた萩元さん。クラシック音楽への造詣も深く、世界的指揮者の小澤征爾さんをはじめ多くの音楽家がその思いに共感し、共に夢を実現してきました。萩元さんは71歳で急逝しましたが、カザルスホールで行われた音楽葬では谷川俊太郎さんが詩を朗読し、今井信子さん、堀米ゆず子さんらが弦楽演奏を披露。小澤征爾さん、井上道義さんの指揮による新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏で見送られるなど多くの演奏家たちから慕われ、愛された人生でした。

萩元さんにとって飯田市は若くして亡くなった愛する母の郷里であり、５歳までの幼少期を過ごした場所。飯田を思い出す時、縁台から見た夏の花火や祭りの神輿、谷川線を走るバスの警笛などと並び、音楽が好きで幼い萩元さんに多くのレコードを聞かせてくれた母の記憶が蘇り、飯田でのコンサート開催を熱望していたといいます。

では、なぜ室内楽だったのでしょうか。萩元さんは小澤征爾さんと音楽論を語り合う中で「音楽の基本は室内楽であり、室内楽を聴く習慣から音楽への関心や知識を深めること

萩元 晴彦 はぎもと はるひこ 略歴

昭和5(1930)年 3月7日
飯田市馬場町で生まれる。5歳のときに母を病で亡くし松本市へ転居する

昭和20(1945)年
南安曇郡烏川村(現安曇野市)に疎開し、旧制松本中学(現松本深志高校)へ通う。野球部のエースとして甲子園に出場

昭和24(1949)年
早稲田大学文学部ロシア文学科に入学

昭和28(1953)年
同大学を卒業。同時にラジオ東京(現TBSテレビ)入社。社会派ドキュメンタリーを次々と制作して注目を浴びる。「神これを癒し給う－心臓外科手術の記録－」「現代の主役・小澤征爾"第九"を揮る」ほか

昭和45(1970)年
TBS時代の仲間と日本初のテレビ番組制作会社「テレビマンユニオン」を創立し、初代社長に就任。「遠くへ行きたい」「オーケストラがやって来た」、ドキュメンタリードラマの先駆けとなった「欧州から愛を込めて」(芸術選奨文部大臣賞)などを手掛ける

昭和62(1987)年
「カザルスホール」(千代田区)の総合プロデューサーに就任。日本初の室内楽ホールとして浸透させる

平成4(1992)年
松本市で「萩元晴彦ホームタウンコンサート」初開催

平成8(1996)年
飯田市で「萩元晴彦ホームタウンコンサートIN飯田」初開催。以降、現在まで続く

平成10(1998)年
長野冬季オリンピック開閉会式総合プロデューサーとして五大陸を衛星中継で結ぶ「第九」合唱を成功させる

平成13(2001)年 1月
大崎善生の原作に惚れ込み、出版元と直談判して映像化権を獲得したドラマ「聖の青春」(TBS・藤原竜也主演)が新春スペシャルドラマとして放送。これが遺作となる

平成13(2001)年 9月4日
脳梗塞で死去。享年71歳。葬儀はカザルスホールでの音楽葬にて行われた

ができる」と確信。室内楽への思いを強くしていったといいます。萩元さんが総合プロデューサーを務めた「カザルスホール」は日本初の室内楽ホールとして"室内楽の殿堂"と称されるほどでした。だからこそ、演奏者の息遣いまで感じられる親密な空気感の中で若い才能と聴衆が育てられていく室内楽の土壌を、自身のホームコンサートを通じて郷里に根付かせたいという萩元さんの強い願いがあったのではないかと考えられます。

このコンサートでは、世界を舞台に活躍する一流の演奏家に加え、これから羽ばたくであろう新進気鋭の若手演奏家も招くスタイルを貫いています。「本物の音楽を飯田の皆さんに提供したい。自分の耳で確かめてこれならという演奏家をたとえ無名でも連れてくる。できれば格安で」をモットーに掲げていた萩元さん。そんな萩元さんの遺志を尊び、現在もそのスタイルは受け継がれています。

第1回コンサートのパンフレットに寄せ「人生の味わいの深くなった人が次の機会に若い人を連れて来られることを夢想する。カザルスホールにはそんな幸せな例がいくつもある。私は飯田にもそれを期待する。そもそもわが飯田はそういう町ではないか」と綴った萩元さん。飯田にいながらにして本物の音楽に触れ、人生を色濃くし、その芽を若い世代へとつないでいく。萩元さんが飯田にもたらした音楽の感動は幸せな循環となり、今後も受け継がれていくはずです。

Interview

萩元春彦ホームタウンコンサート実行委員長

上沼 俊彦 さん

かみぬま としひこ◎1954年、豊丘村生まれ。飯田信用金庫に勤務し、代表理事を務めたのち2017年に退職。同年からNPOしんきん南信州地域研究所の主任研究員を務める。これまでの知見を生かし（公財）長野県産業振興機構 事業継承・引き継ぎ支援センター部南信エリアコーディネーターほか民間企業の役員としても活躍。

［インタビュー・文＝平松優子］

萩元晴彦ホームタウンコンサートの初開催は平成8年。私は1回目から実行委員として携わっています。当時は飯田信用金庫の企画部にいましたが、その際に友人で新聞記者やTV番組プロデューサーをしていた後藤拓磨くんを介して萩元さんから「生まれ故郷の飯田でコンサートをやりたい」と飯田信用金庫にスポンサーの打診がありました。当時理事長だった伊藤篤さんにご相談したところ、伊藤さんが「スポーツや文化事業を通して地域に恩返しがしたい」という思いを強く持っていたこともあり、飯田信用金庫がスポンサーに就き、実行委員を募る形で開催が実現しました。

資金面としてはチケットを販売し、足りない分を飯田信用金庫が補う形をとっています。ただこれは非常に画期的な方式だったようで、萩元さんは雑誌等のインタビューでも事あるごとに「僕の生まれ故郷には飯田信用金庫という心強いスポンサーがいる。スポンサー精神の鏡だ」と感謝してくださっていました。

またこのコンサートでは演奏家と実行委員の懇親の場を必ず設けていますが、その席で世界的ヴィオラ奏者の今井信子さんから言われたことがあったんです。「飯田の聴衆は聴く姿勢を持っている」と。「飯田では皆が前のめりになって聴いてくれる。だから演奏家も応えたくて気持ちが乗ってくる」と言うんですね。ほかにも何人かの演奏家が「飯田の聴衆は素晴らしい」と話してくれました。

おそらくそこにはアフィニス夏の音楽祭で築かれたベースがあり、加えてこのホームタウンコンサートがシナジー効果を生み出したのだと思います。肩の力を抜き演奏を楽しむ余裕が生まれた事。そして何より招聘する演奏家が一流の方ばかりだったことも文化の芽が育まれた理由かもしれません。

しかし難点は、オーケストラに比べて室内楽のコンサートはチケットの販売が難しいという事です。私も最初は1人で大量に売りましたが「さすがに辛いです。この状況では長続きしないと思います」と萩元さんに漏らしてしまった事がありました。そのとき萩元さんがおっしゃったんです。

「上沼さん『すべての新しいことはひとりの熱狂から』」と。

たったひと言でしたが、ガツンと響きましたね。そうか、熱狂から…と。以降、この言葉は自分を鼓舞したいときに思い出す座右の銘になっています。

また、今も忘れがたいのは萩元さんと過ごした日々の思い出です。委員会の懇親会後、もう一軒行こうとしていた私たちに萩元さんが言ったんです。「私も連れていってください。私は自分が寝ている間にみんなが楽しい思いをしているのが悔しいんです」と。この言い方もしゃれていると思いません？それからは毎回最後までお付き合いいただくようになりました。萩元さんが長野五輪でプロデューサーを務めていた際には、長野や松本での打合せ後「今夜空いていますか？」と突然お誘いがあり、わざわざ飯田に足を運んでくださって飲み歩いた事もありました。

「馬場町の萩元です」。コンサートではこう自己紹介していた萩元さん。おそらくこの機会がなければ萩元さんの人生と飯田が交わる事はほとんどなかったと思います。言われたことがあるんですよ。「私のこの遊び好きな血は松本のものではないと前々から思っていましたが、上沼さんや後藤さんと飲んでいて、これは飯田の血だと確信しました」と。それは恥ずかしくもあり、うれしい言葉でしたね。萩元さんは飯田に特別な思いを抱いており、私たちも濃密な時間を過ごさせてもらいました。

このコンサートが飯田にもたらしたもの、それは私には分かりません。私は今もクラシックファンではないですし、実は普段ロックを聴いていることの方が多いです。ただ、やはり「一流のもの」との出会いは素晴らしいこと。何よりも演奏家から「聴衆が素晴らしい」と言ってもらえるまちはなかなかありませんよ。そう考えれば、これまでの取り組みは決して間違いではなかったと確信しています。

「すべての新しいことはひとりの熱狂から」
萩元さんのその言葉が今も耳に残っています

A!IDA アイーダ 外からの視点

日本の人形劇の繊細で美しい動きに感動！伝統の深さにも驚きました

［インタビュー・文=平松優子］

外の視点から見た飯田の文化を紹介するコーナー。今回は「人形劇のまち」として飯田市と友好都市提携を結ぶフランス シャルルヴィル・メジェール市から来日し、昨年5月から飯田文化会館の職員として働いているダコタさんに、日本や飯田市の文化について驚いたこと、感動したことなど話を聞きました。

ー日本に興味を持ったきっかけは?

中学生の時、愛読していたロック雑誌に載っていた日本の「ギルガメッシュ」というバンドに興味を持ったのがきっかけです。歌詞は分からなかったけど日本語の響きが「とてもキレイ」と感じて「X JAPAN」や「the GazettE」も聴くようになりました。また、そのころ友達の間では「NARUTO」や「NANA」など日本のアニメがはやっていたんです。それを見始めてから、小さな頃に大好きで見ていた「ポケモン」や「おジャ魔女どれみ」が日本のアニメだったことに初めて気付きました。登場する景色や食べ物を見て「行ってみたい」「食べてみたい」と思うようになり、いつの間にか友達の中で一番の日本のファンになっていました。

ー学生時代にも何度か来日したんですよね。

初めて日本に来たのは大学2年の時。日仏の交流プログラムで茨城県石岡市のホストファミリーの元で過ごしました。通りで迷っていたら知らない人が「何か手伝いますか?」と声をかけてくれたり、ホストファミリーのお母さんも自分の子どもみたいに接してくれて優しかった。日本のいいところを感じて「日本に住みたい」と思うようになりました。その後、大学3年生、マスター1、2年のときにもインターンシップで来日し、東京の会社で働きました。フランスと日本を行ったり来たりの学生時代でした。

ー飯田市に来たきっかけは?

大学を卒業後、シャルルヴィル・メジェールの市長に直接「日本で働きたい」と伝えて、友好都市の飯田市に履歴書を送ってもらいました。令和2年2月にスカイプで面接を受けて採用が決まったもののコロナの影響で出国の見通しが立たず、2年間待ってようやく来ることができました。

ー飯田市の印象は?

自然がキレイ。どこに行っても山が見えて川もある。町だけど自然がたくさんあるところが好きです。

ー現在はどんな仕事をしていますか?

書類の翻訳や、AVIAMA（人形劇の友・友好都市国際協会）との連絡業務などを担当しています。また、龍江小学校とフランスのノートルダム小学校のオンラインによる交流会も準備や調整をして実施しました。

ー飯田で最初に触れた「文化」は?

ここ、竹田扇之助記念国際糸操り人形館です。人形の動きが自然。操っていない時は人形なのに、操ると「生きていますか?」と思う。特に首の動きが繊細で驚きました。

[vol.1]

ダコタ・ミドウさん

from
フランス

フランスと日本の文化をつなぐ活動をしていきたい

一文化の違いで驚いた事はありますか?

一般の方が人形劇に参加している事。シャルルヴィル・メジェール市の「国際人形劇フェスティバル」には、私も友達と毎年のように通いましたが、演者になった事はありません。飯田の人形劇には小さな子どもたちも学校のクラブがあって、参加していて驚きました。また、日本の人形劇に深い伝統がある事にも驚きました。フランスでも歌舞伎や相撲は有名ですが、人形浄瑠璃のように、人形劇にもこんなに深い伝統があることは知らなかったです。

一今後の夢は?

フランスと日本の文化をつなぐ活動をしていきたい。また、個人的には京都や大阪に旅行したり、日本の文化も体験したいです。初めて日本に来た時は「さくらさくら」の踊りを習ってフェイク桜(※造花)を持ち、浴衣を着て踊りました。また、最近飯田で「水引」も体験したり、京都でも茶道を体験しました。ほかにも生け花などやってみたいことがいっぱい。日本の文化にもっともっと触れたいです。

PROFILE ダコタ・ミドウ

1995年、フランス シャルルヴィル・メジェール市生まれ。母国語である仏語をはじめ、英語、イタリア語、日本語の4カ国語を話すクワドリンガル。音楽やアニメをきっかけに日本を好きになり、日本への旅行やインターンシップを通じて「日本に住みたい」と考えるように。2022年5月から飯田文化会館に勤務。ゴシックロリータやデコラ系など「原宿」ファッションが大好き。

文化的土壌を創り出し、互いが響き合う 伊那谷文化芸術祭

［取材・文＝新井直彦］

伊那谷文化芸術祭のあゆみ

伊那谷文化芸術祭は、飯田下伊那地域で活動している楽器演奏や合唱、人形劇など舞台芸術に関わるアマチュア団体が、日頃の活動の成果を披露し、鑑賞する芸術祭です。運営を統括するのは飯田文化協会と市民の文化活動を支える飯田文化会館（行政）。そこに出演者自らも運営に積極的に関わりつくり手となることで、人々の心のつながりや、お互いを理解し尊重しあう場を創り、新たな文化的土壌を創りだす場を目指しています。

芸術祭の始まりは昭和38年、飯田青年会議所の提唱で「市民音楽祭」を歳末助け合いチャリティー事業として開催したのがきっかけでした。音楽発表の場として長年催されてきた音楽祭は、飯田市制50周年記念の年となる昭和62年からは、人形劇や舞台などあらゆる文化芸術の発表の場として拡充。名称も現在の「伊那谷文化芸術祭」に改めました。令和4年度には36回目を迎え、ジャンルや団体・個人、世代の垣根を越えてつながり、互いに高めあいながら成長していく場となっています。

文化芸術祭の特徴

伊那谷文化芸術祭は、その運営方法が特徴的で「飯田方式」とも呼ばれています。

1. 運営に自らも積極的に関わる出演団体と出演者。
2. 自らも出演者でありながら、運営を統括する飯田文化協会とその役員。
3. 担い手である市民が活き活きと活動する状況をつくることに専念し、共に事業を行っていく飯田文化会館（行政当局）。

この3者が、互いに緊張感を持ちながら、共に進める協働の理念をもって伊那谷文化芸術祭は運営されています。そして、この文化芸術祭を盛り上げるたくさんの観客、これらの人々、組織によって伊那谷文化芸術祭は創られています。

3年ぶりの開催に喜びの声

令和２年、令和３年と新型コロナウイルスの影響で開催が見送られた中、令和４年度は3年ぶりに第36回目を開催。11月6日、13日、20日、27日の4日間、46団体が発表の舞台に立ちました。

久々に舞台に立った出演者の感想は「大ホールのステージでの発表は、普段の練習とは雰囲気も音の響きも全然違い緊張しました。今回こうして仲間と一緒に発表できたことがうれしくて、聞きにきてくれる方や主催者の皆さんに感謝の気持ちを込めて演奏できました」（飯田女子高等学校邦楽クラブ）。「平均年齢82歳、最高齢は99歳でやっています。普段は月2回、芸術祭前は月4回に増やして活動してきましたが、実は私たちは出席率はとても高いんです。メンバーに会うことが楽しみになっています」（飯田シルバーコーラス かざこし）。「地元にゆかりのある人の神楽の発表を通じて、地域の歴史・伝統を伝えていくことの大切さを改めて感じました。神楽は１人でやるものではなくみんなでやるものなので、メンバーで協力してできたことが一番うれしかったです」（浪合小学校５学年）。「コロナ禍で発表の場が減ったため、今回こうして出演できたことがとてもうれしかったです。ステージからはお客さんがよくみえて緊張しましたが、演奏しているうちに気分がすごく盛り上がりました」（和太鼓クラブ ウッホッホ）など、3年ぶりの開催に会場は喜びの声で溢れていました。

好きなことを楽しむ時間が芸術・文化につながる

伊那谷文化芸術祭　ダンス舞踊・舞台の部 部会長

森本典子さん

森本さんが伊那谷文化芸術祭に初めて参加したのは第3回目（平成元年）、JAZZダンスチーム「ダンシングナッツ」での出演。当時舞踊・舞台の部は日本舞踊や太極拳が中心で、ダンスとしては初めての出場でした。照明や音響による演出が欠かせないダンス部門の参画に、当時の照明担当の職員は、とても喜んでくれたそうです。

文化芸術祭の魅力について森本さんは「単独ではなく合同の発表会なので、発表も鑑賞も、受付や舞台裏もやって、みんなで力を合わせてつくるところ。出させていただく場所ではなく、出る場所なんです。そこが楽しいし、一番大事にしたい」と話します。

最近「自分たちは、ただ好きで踊っているだけ」というダンス仲間の言葉にハッとし、好きなことを楽しむことこそが芸術文化につながるのだということを改めて感じたそうです。活動を楽しんでいる人たちが、地元でできる喜びをこの芸術祭を通じて感じ、それがこれから先もつながっていってほしい、そんな願いを胸に日々汗を流されています。

自分たちで文化を創る時代に向かって

「舞台芸術の鑑賞と創造」「人形劇のまちづくり」の2つを柱としてきた飯田文化会館。建設から半世紀が経ち、計画的に改修を行っていますが老朽化は進んでいます。市では令和9年度以降に新しい文化会館の工事着手を目指した長期財政計画を策定。令和4年6月に新文化会館整備検討委員会が発足し、検討を開始しました。

令和4年 6/10（金） 第1回 整備検討委員会

令和4年 7/19（火） 第2回 整備検討委員会

整備検討委員会の委員は19人。利用団体や教育・文化・福祉分野でそれぞれ活躍する団体、公募委員などの市民委員と、ホール運営に携わる専門家、大学教授などの学識委員で構成しています。第1回と第2回の委員会では、新しい文化会館の基本理念を考えるため、意見交換とワークショップを行いました。

文化会館の機能や概念に関するキーワードとして「人との関係をつくる」「地域の人たちが学ぶ場所」「市民とプロと行政のコラボレーション」「地域の人たちが集まって創り出すところ」「文化を主体的に受容し、暮らしと融合する」などの意見が交わされました。

令和4年 9/4（日） 飯田の文化をともに考える BUNKAミーティング

橋南公民館で参加者20人によるBUNKAミーティングを開催。参加者の多くが音楽活動を行う高校生たち。加えて中心市街地の研究で飯田市を訪れていた県外からの大学生4人も参加。少人数に分かれて自由に対話する形でワークショップを行い「こんな文化会館なら行ってみたい！」「飯田の文化芸術で、やりたいこと・活動」という2つのテーマで、意見交換が行われました。

令和4年 9/22（木） 第3回 整備検討委員会

第3回整備検討委員会では、これまで話し合われてきた“飯田の文化とは何か”“飯田文化会館が今まで果たしてきた役割と、これから果たしていく役割は何か”というテーマで出された意見等をもとに新しい文化会館の基本理念について意見交換。これまでのワークショップや市民アンケートで出されたキーワードから、仮の基本理念を検討しました。

令和4年 10/8（土） 「南信州ライフ×高校生ライブ」 in 結いスクエア ～南信州の魅力を音楽で拡げよう～

南信州広域連合が主催し、飯田文化会館が共催。飯田高校ギター班と飯田風越高校のフォークソング部の高校生11人が参加。「南信州の魅力を音楽で拡げる」をテーマに下條村出身のシンガーソングライター・でこさんをゲストに迎え、地域に対する思いや将来について語り合いました。

令和4年 11/25（金） 第4回 整備検討委員会

第4回整備検討委員会は、リニア時代の新しい文化会館のあり方についての学習会を開催。今後の基本構想を検討していくためのヒントを得ました。第1部は、講師に公益社団法人 全国公立文化施設協会 アドバイザーの草加叔也氏を迎え「全国事例から見えてくる新しい時代の地域の公共劇場の姿」というテーマで基調講演を行いました。

自身が劇場長を務める岡山芸術創造劇場の整備プロセスやコンセプト、機能等に触れながら、新文化会館のあり方を考える上で拠り所となる考え方についてお話いただきました。草加氏は「劇場は常に進化をしていて、変化をするもの。ずっと同じサービスを提供しているのではなく、成長する施設なんです」と話しました。

新しい文化会館の基本理念（仮）　11/25 時点案

みんなが集い、創り、伝える　感動の 飯田ひろば

草加氏は公共劇場の果たす役割の変化を具体的事例を交えて説明。「地域性と広域性、専門性と多機能性。2つの軸の中で重心をどこに置くとよいか考えることが重要。仮に設定した新文化会館の基本理念の中にある地域を意識した“飯田”や“ひろば”といった言葉が何を伝えてようとしているのか。そのためにどんなことをしなければならないのか。そのための機能は何かをしっかり考える必要がある」という問題提起がされました。

公共劇場の果たす役割の変化

地域の市民に平等・均等に利用の機会を提供する機能（～30年前まで）

優れた音楽芸術や舞台芸術を招聘し芸術文化に触れる機会を増やす機能（～10年前まで）

「ひと」「まち」「賑わい」をつくる機能（～現在）

創造発信型の劇場

第２部はパネルディスカッションでリニア時代の飯田にふさわしい「新飯田文化会館のあり方」について、草加氏と、整備検討委員会の学識委員・小澤櫻作氏、佐々木宏幸氏、山元浩氏、整備検討委員長の塩澤哲夫氏の対談が行われました。

特別対談 の Point

Point 01 リニア時代には、「まち、賑わい、人 をつくる」といった役割を劇場にどう持たせるかが重要

Point 02 リニアによる時間短縮を、単に人を呼ぶ手段だけでなく、新しい文化会館の創造活動などに生かしていく視点が必要

Point 03 地域の文化施設として飯田周辺エリアを主対象とし「主目的ホール＋専門的小ホール」とする考え方もある。収容しきれない機能は時間距離短縮を活用して別途供給する視点も必要

令和5年 2/3（金） 第5回 整備検討委員会

第５回整備検討委員会からは、基本構想の検討に入り「特別対談のPoint」を踏まえながら、新しい文化会館に必要な活動について話し合いました。話題提供では「新文化会館が、出会いの場、新しい事を実現する場として、日常的な居場所にしたい」と願う高校生・大学生の声を紹介。意見交換では、「日常の中にある文化を介在して、人と人がつながっていく。地域の中で市民が文化的なものに巻き込まれていく」という「飯田らしい文化施設」のイメージが共有されました。

令和５年度 飯田文化会館事業計画

4/16	人形劇定期公演【4月】
5/3~6	オーケストラと友に音楽祭2023
5/20	オーケストラと友に音楽祭 基礎コース
5/20	人形劇定期公演【5月】
5/21	コンサート ア・ラ・カルト VOL.75「フレッシュ・コンサート」
6月予定	人形劇の相談所
7/2	森のかみしばい劇場
7/13	にこにこステージ vol.65
8/3~6	いいだ人形劇フェスタ2023
9/3	わらび座公演 ミュージカル「北斎マンガ」
9/10	人形劇定期公演【9月】
9/17	コンサート ア・ラ・カルト VOL.76「秋の彩コンサート」
9月予定	にこにこステージ vol.66
10/15	人形劇定期公演【10月】
10月予定	ダンボール獅子舞ワークショップ
11/3	人形劇 in 丘のまちフェスティバル
11/5・12・19・26	第37回 伊那谷文化芸術祭
12/3	森のぽかぽかクリスマス
12/17	人形劇定期公演【12月】
12月初旬	コンサート ア・ラ・カルト VOL.77「クリスマスコンサート」
12/23・24	ましゅ＆Keiのクリスマス会
12月予定	にこにこステージ vol.67
1/6	初春を寿ぐ竹田人形館
1/21	人形劇定期公演【1月】
2月中旬	保育士人形劇研修発表公演 「みんなおいでよ！人形劇とうたのお楽しみ会」
2月中旬	いいだ人形劇まつり　りんごっこ劇場
3/17	人形劇定期公演【3月】
3月予定	にこにこステージ vol.68
3月予定	飯田フォークフェスタ vol.4
通年（5月～10月）	人形劇講座　初級コース
通年	人形劇講座　製作・上演サポートコース
通年	人形劇講座　ユースクラブ
秋予定	オーケストラと友に音楽祭 基礎コース
秋予定	第44回 市民落語鑑賞会 おいでなんしょ寄席
秋予定	飯田信用金庫presents 第20回萩元晴彦ホームタウンコンサート

詳しくは、文化会館のWEBサイトをご覧ください

情報誌のタイトル「toi toi toi（トイトイトイ）」。幸運や成功を祈るドイツの「おまじない」で、世界中の舞台で使われている言葉です。開演直前に誰もが緊張している中、舞台上や舞台袖で「うまくいくよ！」「大丈夫！」と、仲間の成功や幸せを祈り「toi toi toi」と声を掛け合います。
このタイトルには、「to i」愛の方へ、私（I）の方へ、飯田（IIDA）の方へ、人の方へ、という意味も込められています。
新文化会館整備検討委員会やワークショップで出された「みんなが（誰もが）集う」「ワクワク感」「楽しむ場」「飯田ひろば」の実現を願い、みんなで共有できる掛け声としてtoi toi toi！

私たちと一緒に情報誌をつくりませんか

飯田文化会館では、情報誌の制作や広報活動にご協力いただける方を募集しています。企画・取材をはじめ、情報発信など、私たちと一緒に広報活動をしませんか。
ご興味のある方は、飯田文化会館まで、お気軽にお問い合わせください。
また、あなたの飯田文化会館での思い出や、その他情報をお待ちしています。

ibunka@city.iida.nagano.jp

飯田文化会館 情報誌　toi toi toi！　1号
2023年4月発行
制作 ｜ 飯田文化会館
〒395-0051 長野県飯田市高羽町５丁目5-1
TEL. 0265-23-3552
企画・編集 ｜ toi toi toi！制作チーム
デザイン ｜ 北林 南（合同会社 伊那谷サラウンド）
イラスト ｜ オリハラ ケイコ